聖路加 チャペルニュース

2020年３月１日　No.257

〒104-0044
東京都中央区明石町10-1
聖路加国際大学礼拝堂
TEL 5550-2416（日曜）
TEL 5550-7043（平日）
FAX 5550-7070
E-mail: chapel@luke.ac.jp
URL: http://nskk.org/tokyo/church/luke

2020年度チャペル委員

聖書に学ぶ会

●第1日曜日　午後　聖書を読む会
●第1･第3木曜日　午前10時　新約聖書
●第2･第4火曜日　午後５時30分　旧約聖書
場所…旧館２階　プライベートルーム
日程・場所変更の場合があるため事前にご確認ください。

巻頭メッセージ
苦しみの謎

礼拝案内

月･火･木･金曜日
■午前8時30分　朝の礼拝　トイスラーホール

水曜日
■午前8時30分　聖餐式　トイスラーホール

※第2水曜、第3火曜、第3水曜の礼拝は午前8時45分～

日曜日
■午前7時　聖餐式　トイスラーホール
■午前10時　日曜学校礼拝　臨時チャペル
■午前10時30分　聖餐式・説教　臨時チャペル
■午後5時　夕の礼拝 トイスラーホール

チャプレンメッセージ

苦しみの謎

司祭　ケビン・シーバー

「善良な人に悪いことが起こるのはなぜか。」病室で響く嘆き。永遠に問われる問題。なお、今までは心のもやもや感を除き、納得させるような答えは出て来ない。「善良な人」は本当にいるのかという疑問はさておき、そもそもこの世に苦しみがあるのはなぜか、そして、神さまが愛の神ならば、その苦しみについてなぜ何もしてくださらないのか、という嘆きはいつでもある。

なぜこの世に苦悩が生ずるかに関しては、キリスト教が主張する。人間がこの世のバランスを崩してしまった、と。その起源は謎に包まれているが、神はご自分がお造りになった世界を見て「**極めて良かった**」（創世記一章三一）と評価なさったにも拘わらず、創世記の続きを読むと、人類を代表し、人間の心の根本的な向きを表すアダムとエバは神が整えてくださった祝福と平和の道から歩み去り、人間の本来の在り方から遠ざかり、神との親しい交わりに背を向けてしまったことが分かる。神に背を向けるという決定から世の中のありとあらゆる災いが生まれた、と聖書は説明する。

こういう「神なしに生きる」態度を聖書は「罪」と呼ぶ。罪は個々人の悪事や怠りに限らない。しかも、個人が何か悪いことをして苦しませられるという概念を聖書は真っ向から拒否する（ルカ一三章参照）。むしろ、人類が連帯して犯してきた罪から種々の災いが生まれる、ということ。環境汚染に似ている。わたしたちは霊的に汚染された世界に生まれた。生まれるずっと前から紡がれた網――歴史の網、欲望と報復の網、偽りと無知の網、家庭内の秘密や遺伝や環境の網、こういった網に絡みついて苦労している。自分自身と他人の誤った判断や通らなかった道に悩まされる。さまざまな出会いや経験によって良い意味でも、そして時々とても悪い意味でも影響を受けている。こういう意味で、人間の罪と世の中の苦しみは必ずしも無関係ではない。

では、神さまが愛の神ならば、この苦しみについてなぜ何もしてくださらないのか。何もしてくださらないはずがない。神さまは愛のゆえにその独り子、イエス・キリストを送ってくださったのである。人間の苦しみを共有するためにこそキリストが来られた。そしてキリストは十字架の上でご自分の命をささげ、わたしたちの罪を取り消してくださった。

この「神の介入」には主に三つの結果が伴う。第一に、身分変更だ。キリストにあってわたしはもはや神から疎外された罪人ではなく天の父の子どもなのである。愛される子どもとしての新しい生きる道が開かれている。第二に、希望がある。世の中の苦しみと自分自身の苦しみに遭っても、より良い世界への望みを持てる。かの日、夢でしか見たことのない母国に帰国することを楽しみにできる。「**見よ、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない**」（黙示録二一章三～四）。

そして第三に、わたしたちは内側から変えられている。罪に絡まっていたわたしたちの魂はキリストによって再び清いものにされている。場合によって苦しみ自体がこの清めの作業の手段となり得る。「外なる人」が衰えてもわたしたちは祈りの中で「内なる人」の変容と回復を願うことができる。最期の最期までそう祈れる。「**わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです**」（第二コリント四章一六～一八）。